

# 点字表記法の現在とこれからの在り方

——分かち書きと切れ続きを中心に——

小 澤 実 咲

## 1. はじめに

### 1-1. 研究動機

従来、視覚障がい者は墨字へのアクセスが難しく、文字の読み書きには点字を使用していた。しかし近年はIT技術の発達により、スクリーンリーダーや拡大鏡などを使用して視覚障がい者でもパソコンやスマートフォン、タブレット端末等から墨字へのアクセスが可能となり、その機会や必要性が格段に増えている。そこで、視覚障がい者の中には点字と墨字の両方を扱う必要がある者も増えてくるのだが、実は同じ日本語でありながら点字と墨字には表記法や仮名遣いに少なからず差異が見られる。点字には点字独自の表記法が定められており、特に助詞や長音の仮名遣い、分かち書き・切れ続きをするという点で墨字との違いがある。このことは幼少期から点字を使用する者と、途中で視覚障がい者となり、墨字文法に一定年数慣れ親しんできた者のどちらにも戸惑いや不便性を感じさせるのではないかと。以前、実際に長年点字に親しんできた視覚障がい者が、メールのやり取りをする際に「ありがとございます」や「きょーわ よろしく おねがいします」という文章を作成していたという話を聞いたことがある。この仮名遣いや分かち書きは点字を書き表す際に用いられるもので、点字に馴染みの薄い者にとっては「間違った日本語表記」と思われてしまうだろう。このように二つの文字の表記法が異なることによって、社会における視覚障がい者の文章作成やコミュニケーションの場で不都合が生じるのではないかと考えた。

そこで本稿では点字と墨字の表記の中でも特に分かち書きと切れ続きについてまとめ、視覚障がい者にとってよりコミュニケーションが取りやすく、社会で活躍していくためにふさわしい点字文法のあり方について、日本語学の観点から検討・考察を行うこととする。

## 2. 点字とは

### 2-1. 点字・墨字とは

点字は1825年にフランスのルイ・ブライユによって考案されたことに始まり、日本点字はこれをもとに作成が推進され、1890年に石川倉治の案が採択されたことで誕生した。これ以降、点字表記のルールは度々改変され、その表記法は日本点字委員会が発行する点字表記法書にまとめられている。なお、現在の点字表記のルールは『日本点字表記法 2018年版』

(2018)に基づいている。

点字1文字の単位を「マス」といい、一マスは縦3点、横2点からなる。ひらがなやカタカナの区別はなく、日本語文字のほかに数字やアルファベット、記号等を書き表すことができる。もちろん、日本語だけでなく英語・フランス語・中国語などの諸国の言語や、楽譜、点図（浮き上がらせた点や線を用いて図や絵を表したもの）も存在する。

また、墨字とは、主に視覚に障がいのない者が普段読み書きに使用している視読文字のことで、点字に対してこのような名称を用いる。本稿は墨字により執筆されたものである。

## 2-2. 「分かち書き」と「切れ続き」





点字は漢字を使用しないため基本的に文節による分かち書きを行う。日本語は墨字では特別な場合を除いては基本的に漢字仮名交じり文で表記されるため、英語や韓国語などは異なり分かち書きを行うきまりはない。ここで例外となる特別な場合とは、小学校低学年の教科書や初級日本語学習者向けの教科書、「やさしい日本語」などのことである。これらの文章は漢字が使用されないか、使用されたとしても簡単な漢字に留まるため、必然的に平仮名の量が増えて分かち書きがされる。しかし、これらの分かち書きの仕方については文化庁の定める「現代仮名遣い」のようにルールが正式に定められているわけではない。そのため多くの場合で、墨字の文章が点訳される際には改めて分かち書きや「切れ続き」をしながら表記されることとなり、点字独自の表記法としてルールが定められているのである。

なお、この「切れ続き」は文節による区切りである分かち書きと異なり、自立語や固有名詞内部の構成要素によって語を区切って書き表すことを言う。分かち書きによる区切りだけではひと続きが長くなってしまふ語があるため、複合語を区切って書き表す。これを分かち書きと区別して「切れ続き」と呼ぶ。

## 3. 「分かち書き」・「切れ続き」の考察

### 3-1. 「切れ続き」

#### 3-1-1. 「切れ続き」のルール

「切れ続き」をすると具体的にどのように区切られるのか。例として「家族会議」や「携帯電話」を挙げる。これらをそれぞれ点字で書き表すと「  (カゾク カイギ)」「  (ケイタイ デンワ)」のようになる。このように、複合語や長い固有名詞などを読みやすくするために途中で区切ることを「切れ続き」という。「切れ続き」を行う理由について『日本点字表記法 2018年版』(2018)には「文章の意味を理解しながら速く読むためには、意味のまとまりごとに区切ってある方がよい」と述べられている。つまり、一区切りのマスの数があまり多すぎると意味が理解しづらくなり、また、読むのにも時間がかかるということだと理解できる。

「切れ続き」の考察には伊坂幸太郎(2012)『残り全部バケーション』を資料として使用する。この資料を選択した理由としては、先んじて確認した絵本や小学校低学年用教科書では

得にくかった複合語の例が多く見られること、小説であるため、話し言葉などの改まった文体以外の文章も見られることが挙げられる。考察には2012年に発行された第1版と、2013年に渡辺京子氏の点訳により日本点字図書館で作成された点字図書を使用する。点字図書の作成が『日本点字表記法 2018年版』の発行以前のため、拠り所とされた点字表記法書は『日本点字表記法 2001年版』であると考えられる。しかし2001年版と2018年版では今回考察の対象としている「切れ続き」に関して大きな改定は見られないため、考察に支障をきたすものではないと判断した。

### 3-2-2. 切れ続きの問題点

『日本点字表記法 2018年版』(2018)では「分かち書き」を第1の原則、「切れ続き」を第2の原則としている。点字表記においてこれらの表記法を採用する理由について、特に「切れ続き」については以下のように述べている。

元来分かち書きは、文節ごとに区切ることによって、それぞれの語の意味の理解はもとよりのこと、文全体の意味を速く理解できるようにすることを目的として行うものである。(中略)ところが、一つの長い複合語や固有名詞の中には7拍以上にもなるものがあり、記憶の単位としては適さないし、内部に独立性の強い意味のまとまりが複数ある場合でも、それを素早かつ確に判断することは難しい。そこで、自立語内部にある独立性の強い意味のまとまり(区切って書き表した方が意味の理解を助ける構成要素)で区切ることが第2の原則とし、これを切れ続きと呼ぶ。

「拍」は、言い換えれば「音の長さの単位」であると理解できる。では、この「音の長さ」による区切りは本当に点字表記に適しているのだろうか。墨字では拗音などの例外を除けばほとんどが一文字がそのまま一拍に数えられるが、点字では少々異なる。点字では拗音のほかにも濁音、半濁音なども二マス使って書き表すため、墨字よりも点字の方が使用するマスの数が多くなる場合が少なくない。




「拍」が区切りの基準となっているものの一つとして「自立語内部の切れ続き」の複合名詞の切れ続きに以下のようなものがある。

(1) 複合名詞の構成要素のうち、3拍以上の独立性の強い意味のまとまりが二つ以上あればその境目で区切って書き表し(例1)、2拍以下の意味のまとまりは3拍以上の意味のまとまりの前か後ろに続けて書き表すことを原則とする(例2)。

[例1] サクラ ナミキ(桜並木) マツタケ ゴハン(松茸ご飯)  
アイス クリーム

[例2] マツナミキ(松並木) カテイゴミ(家庭ごみ) マツタケメシ(松茸飯)  
エビグラタン(海老グラタン) クルマイス(車椅子) サラリーマン

[例1]と[例2]を見て分かるように、「桜並木」と「松並木」、「松茸ご飯」と「松茸飯」はその性質や意味を同じくしていても各構成要素の拍数の違いにより、区切りの有無の点で表記が異なる。この4語について点字表記を確認すると、「 $\text{::}::\text{::}$   $\text{::}::\text{::}$  (サクラ ナミキ)」

「  (マツタケ ゴハン)」「 (マツタケ メシ)」となる。これは共通する「並木」と「松茸」がそれぞれ 3 拍と 4 拍であり、その前後に付属する「桜」と「ご飯」は 3 拍、「松」と「飯」が 2 拍であるため、前者は切れ続きを行い、後者は続けて書き表すというルールに従っている。しかしマス数を見ると「桜並木」「松並木」「松茸飯」はそれぞれの拍数とマス数が一致しているが、「松茸ご飯」、特に「ご飯」は 4 マスで書き表されることとなり、拍数とマス数が異なっている。

以上、拍数と点字表記のマス数が異なる場合があることが点字表記法書の例からも確認できた。この他に以下の例を確認したい。

① 2 拍以下の構成要素を持つ複合名詞					
番号	点字	下線部マス数	墨字に修正	下線部拍数	墨字 (漢字仮名交じり)
1		3	カイギ <u>ベヤ</u>	2	会議部屋
2		3	ベツ <u>セカイ</u>	2	別世界
3		3	キザオトコ	2	気障男
4		3	ジュータク <u>ガイ</u>	2	住宅街
5		3	チュウシャ <u>ジョニ</u>	2	駐車場
6		3	エビ <u>グラタン</u>	2	海老グラタン
7		3	アジ <u>フライ</u>	2	アジフライ
8		3	カジショクニ <u>ン</u>	2	鍛冶職人
9		3	トクベツ <u>ビン</u>	2	特別便
10		3	デントウ <u>ガイ</u>	2	伝統芸
11		3	ジュッセイ <u>カツ</u>	2	実生活
12		3	ナベリ <u>ョーリ</u>	2	鍋料理
13		3	ミズシ <u>ゴト</u>	2	水仕事
14		3	ニジコ <u>カ</u>	2	二次効果
15		3	ホシユシ <u>ギ</u>	2	保守主義

② 3 拍の構成要素を持つ複合名詞					
番号	点字	下線部マス数	墨字に修正	下線部拍数	墨字 (漢字仮名交じり)
1		3	カイギ <u>ルーム</u>	3	会議ルーム
2		3	カクウ <u>セカイ</u>	3	架空世界
3		3	ウキヨ <u>オトコ</u>	3	浮世男
4		3	ジュータク <u>ローン</u>	3	住宅ローン
5		3	チュウシャ <u>イハン</u>	3	駐車違反
6		3	キノコ <u>グラタン</u>	3	きのこグラタン
7		3	ササミ <u>フライ</u>	3	ささみフライ
8		3	ウエキ <u>ショクニン</u>	3	植木職人
9		3	トクベツ <u>ニンム</u>	3	特別任務
10		3	デントウ <u>イフク</u>	3	伝統衣服
11		3	イナカ <u>セイカツ</u>	3	田舎生活
12		3	サカナ <u>リョーリ</u>	3	魚料理
13		3	ハタケ <u>シゴト</u>	3	畑仕事
14		3	シンリ <u>コーカ</u>	3	心理効果
15		3	コテン <u>シュギ</u>	3	古典主義

表にはそれぞれ拍数、墨字の字数、点字のマス数で数値を示した。語は3拍以上の構成要素を持つ複合名詞をそれぞれ2語ずつ示した。まず①2拍以下の構成要素をもち、前後の構成要素と続けて書き表される複合名詞、そして②3拍の構成要素を持ち、前後の構成要素と区切って書き表される複合名詞とを比較した。①は濁音や拗音などを含み、2拍でありながら点字のマス数が3マスになるものを選んだ。これらの語の例から、拍数に違いがあってもマス数が同じになる2拍の語と3拍の語が少なからず存在することが分かる。マス数が同じであるのに、一方は「切れ続き」を行い、一方は続けて書き表すというのは不思議に思われる。読みやすくするために「切れ続き」を行うということだが、マス数が同じであれば読みやすさにも変わりはないのではないか。つまり、「切れ続き」のルールを定めるには音の長さの単位である「拍」は適さないと考える。

次に「独立性」について考察する。点字表記法書には「切れ続き」を行うか否かの判断に、たびたび「独立性の強い意味のまとまり」や「独立性の弱い要素」などという基準が設けられている。この「独立性」とは何か。複合名詞の「切れ続き」に関するルールにはすでに引用したもの他に以下のようなものもある。

(2) 複合名詞の構成要素のうち、2拍以下の独立性の強い意味のまとまりは、意味の理解を妨げる場合には後ろまたは前の独立性の強い意味のまとまりとの間を区切って書き表してもよい。(ただし、2拍以下の名詞の中には、複合語全体の中で、独立性の強い意味のまとまりとして役割を果たしているのか、独立性の弱い要素なのかの解釈には幅が見られる例もある。例:「意義、椅子、義理、味噌、柚子、胡椒」など)

【例】 シカ イシ (歯科医師)    コーツー ジコ (交通事故)

          クルマ イス (車椅子)    メリー ゴー ラウンド

【備考】 2拍であっても漢字2字の漢語は独立性が強い場合が多い。

【注意1】 2拍以下の意味のまとまりのうち、独立した名詞と考えられているものは、前または後ろの独立性の強い意味のまとまりとの間を区切って書き表す。

【例】 アシ ゼンタイ (足全体)    ミギ ハンブン (右半分)

          トーキョー ハツ (東京発)    ハカタ チャク (博多着)

          ダイ チュー ショー (大中小)

主に2拍以下の構成要素をもつ複合語において、この「独立性」が特に重要な基準になっていることが分かる。しかし、どのような語が「独立性」が強いと言えるのか、どのような要素を持つと「独立性」が強まるのかといった「独立性」に関する定義は明記されていない。

【備考】 からは和語や漢語の場合、漢字に変換した際の字数が独立性の判断の参考になりうるということが分かるが、(2)に独立性の有無については解釈が分かれることが但し書きされているように確実ではない。さらに漢字1字の語に対しての判断基準はここから窺うことはできない。

また、「車椅子」は「クルマイス」としても「クルマ イス」としてもどちらも許容されていることが(1)【例2】、(2)【例】から分かる。しかし車椅子は車でも椅子でもなく、「車

椅子」という独立したモノである。「椅子」は確かに漢字2字ではあるが、「車椅子」の語の中の「椅子」は独立性が高いと言えるのだろうか。2拍で座るモノというと、他に「席」が挙げられる。「席」を含む複合名詞は伊坂（2012）『残り全部パケーション』を見ると「運転席」「助手席」など、車に関する語が見られ、「ウンテンセキ」「ジョシュセキ」とひと続きに書き表されていた。どちらも車内の席の種類であるから「運転席」「助手席」のそれぞれで1語であるように考えられるため、ひと続きに書き表されることに特に違和感は覚えない。「車椅子」もこれらと同じように考えることができるのではないだろうか。それどころか「車椅子」は「車」でも「椅子」でも、そのどちらかの種類というモノではないのだから、「運転」と「席」、「助手」と「席」の関係よりも語の結びつきは強いように考えられる。

このような現状のルールでは受け手個人の印象や判断によって「独立性」の有無の解釈に揺れが起こるのではないか。但し書きとして「意義」や「椅子」などの例が挙げられていることから混乱が窺える。点字図書の作成に携わる点訳者にはボランティアも多く、つまり日本語の仮名遣いや国語文法に関する専門的な知識を有していない場合が多いということになる。独立性の有無の解釈が難しいことは、点訳者にとっても、また視覚障がい者が自身で点字を書く場合にも同じことが言えるのではないか。点字を使用する人がこの事項についてより簡単に理解できるように、「独立性」とは何かということをつかりやすく明記する必要があると考える。

ここまで複合名詞の「切れ続き」について考察したが、次に複合動詞について取り上げる。複合動詞の「切れ続き」については「7. 動詞の連用形などに継続する動詞や形容詞」という項目があり、以下のように定められている。

動詞の連用形や形容詞・形容動詞の語幹に接続する動詞や形容詞は、続けて書き表すことを原則とする。

【例】 アルキツツケル（歩き続ける） シズカスギル（静かすぎる）  
ハシリヤスイ（走りやすい） アツクルシイ（暑苦しい）

なぜ複合名詞は「切れ続き」を行うのに複合動詞にはそれが適用されないのだろうか。すでに確認したが、「切れ続き」を行う理由として「長くなると読みにくい」という意見が挙げられていた。「一つの長い複合語や固有名詞の中には7拍以上にもなるものがあり、記憶の単位としては適さない」（『日本点字表記法 2018年版』（2018）と、すでに引用した文章であるが、ここに「7拍以上」と具体的な拍数が示されている。読みにくさを感じることの多い長さは7拍以上であるということだろうか。点字表記法書にはこの「7拍」という拍数はあまり触れられることのない長さであり、ここでなぜ「7拍以上」とされているのかは不明である。しかし一応ここで具体的な長さが示されるため、これを基準として伊坂（2012）『残り全部パケーション』で使用されている複合動詞の拍数と点字のマス数について確認すると以下のとおりである。

複合動詞・点字			複合動詞・墨字			
行数	点字	マス数	行数	墨字	字数	拍数
38	⠠シ ⠠ア ⠠オ ⠠ウ ⠠ジ ャ	6	38	シアオウジャ	5	4
39	⠠イ ⠠イ ⠠ダ ⠠シ ⠠タ ⠠ノ ⠠ワ	8	39	イイダシタノワ	7	7
50	⠠オ ⠠モ ⠠イ ⠠ダ ⠠シ ⠠テ ⠠ヨ	9	50	オモイダシテヨ	8	7
186	⠠フ ⠠キ ⠠ハ ⠠ジ ⠠メ ⠠ル	8	186	フキハジメル。	7	6
234	⠠シ ⠠ズ ⠠マ ⠠リ ⠠カ ⠠エ ⠠ル	9	234	シズマリカエル。	8	7
251	⠠サ ⠠ガ ⠠リ ⠠ダ ⠠ス	8	251	サガリダス。	6	5
271	⠠イ ⠠タ ⠠メ ⠠ツ ⠠ケ <sup>ル</sup>	6	271	イタメツケル	6	6
321	⠠カ ⠠キ ⠠ハ ⠠ジ ⠠メ <sup>ル</sup>	8	321	カキハジメル。	7	6
391	⠠ホ ー ⠠リ ⠠コ <sup>ミ</sup> ⠠ナ <sup>ガ</sup> ⠠ラ	9	391	ホーリコミナガラ	8	8
413	⠠ワ ⠠タ <sup>リ</sup> ⠠ア <sup>ル</sup> ⠠イ <sup>テ</sup>	7	413	ワタリアルイテ	7	7
428	⠠オ <sup>ド</sup> ⠠シ <sup>ツ</sup> ⠠ケ <sup>レ</sup> ⠠バ	9	428	オドシツケレバ	7	7
450	⠠フ <sup>ン</sup> ⠠ゾ <sup>リ</sup> ⠠カ <sup>エ</sup> <sup>ッ</sup> <sup>テ</sup>	9	450	フンゾリカエッテ	8	8
480	⠠ソ <sup>ノ</sup> ⠠ギ <sup>ハ</sup> <sup>ジ</sup> <sup>メ</sup> <sup>タ</sup>	10	480	ソノギハジメタ。	8	7
668	⠠カ <sup>ナ</sup> ⠠シ <sup>ミ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ゲ</sup> <sup>イ</sup> <sup>タ</sup> <sup>ガ</sup>	12	668	カナシミナゲイタガ、	10	9
827	⠠コ <sup>リ</sup> ⠠カ <sup>タ</sup> <sup>マ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>タ</sup>	7	827	コリカタマツタ	7	7
897	⠠ト <sup>オ</sup> <sup>リ</sup> <sup>ヌ</sup> <sup>ケ</sup> <sup>ヨ</sup> <sup>ー</sup> <sup>ト</sup>	8	897	トオリヌケヨート	8	8
1071	⠠オ <sup>モ</sup> <sup>イ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>ヤ</sup> <sup>ム</sup>	6	1071	オモイナヤム	6	6
1077	⠠イ <sup>イ</sup> <sup>ナ</sup> <sup>オ</sup> <sup>シ</sup>	6	1077	イイナオシ、	6	5
1082	⠠ア <sup>オ</sup> <sup>ジ</sup> <sup>ロ</sup> <sup>イ</sup>	6	1082	アオジロイ	5	5
1104	⠠タ <sup>ダ</sup> <sup>ヨ</sup> <sup>イ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ジ</sup> <sup>メ</sup> <sup>テ</sup>	10	1104	タダヨイハジメテ	8	8
1175	⠠ネ <sup>ム</sup> <sup>リ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ジ</sup> <sup>メ</sup> <sup>テ</sup>	8	1175	ネムリハジメテ	7	7
1190	⠠ズ <sup>リ</sup> <sup>オ</sup> <sup>チ</sup> <sup>ソ</sup> <sup>ー</sup> <sup>ニ</sup>	8	1190	ズリオチソーニ	7	7
1199	⠠タ <sup>ベ</sup> <sup>オ</sup> <sup>エ</sup>	6	1199	タベオエ、	5	4
1227	⠠ト <sup>オ</sup> <sup>リ</sup> <sup>ス</sup> <sup>ギ</sup> <sup>タ</sup>	7	1227	トオリスギタ	6	6
1256	⠠ワ <sup>ラ</sup> <sup>イ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>ケ</sup> <sup>テ</sup>	8	1256	ワライツツケテ	7	7
1282	⠠オ <sup>シ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>ケ</sup> <sup>ル</sup> <sup>ノ</sup> <sup>ワ</sup>	8	1282	オシツケルノワ、	8	7
1298	⠠ヨ <sup>ミ</sup> <sup>オ</sup> <sup>ワ</sup> <sup>ツ</sup> <sup>タ</sup> <sup>ゼ</sup>	9	1298	ヨミオワツタゼ	8	7
1347	⠠オ <sup>モ</sup> <sup>イ</sup> <sup>ダ</sup> <sup>シ</sup> <sup>タ</sup> <sup>ノ</sup> <sup>デ</sup>	11	1347	オモイダシタノデ、	9	8
1396	⠠ノ <sup>リ</sup> <sup>イ</sup> <sup>レ</sup> <sup>タ</sup>	6	1396	ノリイレタ。	6	5
1435	⠠ウ <sup>ゴ</sup> <sup>キ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ジ</sup> <sup>メ</sup> <sup>タ</sup>	10	1435	ウゴキハジメタ。	8	7
1440	⠠イ <sup>イ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ジ</sup> <sup>メ</sup> <sup>タ</sup>	8	1440	イイハジメタ。	7	6
	⠠平均	8.064516		字数平均/拍数平均	7.0967742	6.5806452

点字でのマス数、墨字での文字数、そして拍数を数値化し、平均値を示した。拍数の平均は約6.7拍と、点字表記法書で触れられていた7拍には満たなかったものの、ほとんど7拍に近い数値である。また、拍数の最大値は9拍で「カナシミナゲイタガ、」である。これは点字のマス数は12マス、墨字の文字数は10字となり、どちらも最大値だった。これを踏まえ、これからの点字の「分かち書き」・「切れ続き」の在り方については二つの方向性が考えられ

ると考察し、それを次章でまとめとして記すこととする。

次に連濁の問題を挙げる。自立語内部の構成要素のうち、3拍以上の独立性の強い構成要素は区切って書き表されることはすでに確認した。しかし、連濁が起こる場合には「複合語の構成要素が、二つ以上の独立性の強い意味のまとまりから成っていても、連濁を生じた場合には、その部分を続けて書き表す」とある。

連濁が生じる語は確かに語同士の結びつきが強いといえるだろうが、これだけを判断材料にするのは適切ではないと考える。初めから濁音で始まる語やア行、ナ行などのように語の結びつきの強さとは関係なく、その音の性質上連濁が不可能になる語が存在する。また、習慣として連濁しない語やしづらい語も多くあるだろう。連濁が生じることのできる語はほんの一部の語に限られるのである。この点は鈴木・大田（1983）も過去に指摘している。

#### 4. これからの点字文法の在り方

##### 4-1. これからの点字表記―「分かち書き」と「切れ続き」―

ここでは「分かち書き」と「切れ続き」について、以下の二つの可能性を考察したい。

###### ①区切りを細分化する

サ変動詞「する」の切れ続きについて、『2001年版』の編集の際に行ったアンケートによりサ変動詞「する」の前を区切りたいという意見が7割に達したため、『日本点字表記法2001年版』より切れ続きの項目に「8. サ変動詞など」が追加されることとなったという経緯がある（金子（2004））。これを踏まえ、点字はなるべく細かく区切って書き表されていた方が読みやすいと感じる人が多いのではないかと考えた。また、7拍以上になると長くて読みづらくなるという指摘もされていたが、複合動詞は長いもので10拍を超えるものもあり、平均値を見てもほぼ7拍であった。さらに、複合名詞や固有語名詞は「切れ続き」を行うという決まりが定められている。そうであるならば、同じ複合語として複合動詞も区切って書き表した方がよいのではないか。それにより一つのまとまりがより短くなり、また、表記法としても統一性が出るように感じる。複合語の中でも名詞は区切って書き表し、動詞は続けて書き表すというのは不統一に感じるし、表記法をより分かりやすくするためにはなるべく表記の仕方が統一されていたほうが良いと考える。

また、助動詞の分かち書きについては続けて書き表すことになっているが、これは語によっては拍数がかなり長くなる。例えば伊坂の「シタガワセタカッタダケナノカモ。」は拍数が15拍、文字数は16字、さらに点字のマス数は18マスにもなる。同様に、「オコッテルミタイナダヨナ」は拍数が13拍、文字数は15字、点字のマス数は16マスである。このように拍数が7拍以上になるものは決して少なくない。「みたいな」「のような」といった助動詞が用いられると、その拍数は多くなる傾向がある。助動詞にはこのほかにもそれだけで拍数が多くなるものが助詞に比べて多い。「分かち書きの問題点」で改めて考察することはしなかったが、サ変動詞や複合名詞などの切れ続きのルールや統一性を持たせることを考えると、助動詞も区切って書き表す方が読みやすくなるのではないだろうか、というのが一つ目の考え



である。

## ②なるべくひと続きに書き表す

これは①の考えとは正反対のものになるのだが、細かく区切りすぎることをやめ、なるべくひとつづきに書き表すようにするというものである。助動詞を続けて書き表すことで拍数がかかなり多くなるということを①で指摘したが、逆に考えれば、この長さで読みに支障をきたさないのであれば、他の語についても続けて書き表しても良いのではないかという考えである。①で指摘したような助動詞はごく頻繁に使用されるため、このように7拍以上になる場合があることや、先述したように複合動詞を続けて書き表すきまりがあることから、あまり細かく区切らなくても読みにきたす支障は少ないのではないかと考えた。語を細かく区切ることによって表記のルールが複雑化し、点字に対するハードルの高さや点訳者の混乱が大きくなってしまわないかという懸念も考えられる。

また、実際の点字使用者の声として広瀬（2019）に以下のような意見がある。

「たまごサンド」の文字使いは、見た目のバランスなどで適当に決められているのだろうが、「正しい点字」表記では「たまご□さんど」となる。サンドイッチ用のパンの素材や卵（玉子）の鮮度に重きを置く店では「たまご□さんど」という点字表記がいいと思うが、たまごとパンの絶妙なハーモニーを追求する場合はどうだろう。僕の感性では「たまごさんど」という点字表記の方が食欲をそそられる。

語にはその語の持つリズムやイメージがある。区切りを入れるということは、場合によってはそれを断ち切ってしまうことでもある。続けて書き表すことでそれらがより伝わりやすくなる場合も多いのではないか。藤田・河住（2011）に以下のようなものもある。

調査協力者の中に、「カイシャニ オイテ アル オオキナ キンコ」の「カイシャニ オイテ アル」が「キンコ」の連体修飾節とは気づかず、補助動詞「テ アル」の中で区切り、「ある大きな金庫も…」という読みをした者がいた。この調査協力者は、下線部以降を読むことで、すぐに軌道修正がされたが、音読後のフォローアップインタビューで、触読する際には、言葉の区切り方を誤り、文意を読み違えてしまうことがあると述べていた。

これは語を細かく区切りすぎているために生じた誤読の一例と言える。「オイテ アル」ではなく「オイテアル」とひと続きに書かれていれば、このような誤読は起きにくくなるだろう。切れ続きは意味を理解しやすくする目的で行われているものだが、このように逆に意味を取りづらくさせてしまう場合がある。点字文章を読むには一字ずつ点字に触れて読み進めなければならないため、障がいのない者が墨字を視読する場合よりも時間がかかることが多い。また、前の文章に戻って読み直すことも非常に労力がかかる。そのため、分ち書きや切れ続きによって誤読が生じたり意味が取りづらくなったりして何度も読み直さなければならないような文章表記はなるべく避けるべきである。以上の理由からこれを二つ目の考えとする。

現在の点字表記法は、特に分ち書きと「切れ続き」の点で非常に複雑化していると言え

る。以上二つの考えは内容としては相反するものだが、表記の仕方をなるべく統一するべきであるという考えでは共通している。複雑化による問題は、点訳者や中途視覚障がい者の学習者にとどまるものではない。なかの(2015)によると、分かち書きは規範性が強く、学校では分かち書きを間違えると国語のテストで減点されることがあるという。障がいがあっても墨字へのアクセスが可能になったことは喜ばしいことだが、それに伴い視覚障がい者が身に付けなければならない知識や求められるスキルが飛躍的に増加することも想像できる。点字の読み書きだけでなく、漢字を覚え、音でそれを確認して変換する能力などがその一例である。より多くの学習が求められる中で、複雑な分かち書きでつまずき、時間を取られてしまうのは生産的ではない。これらのルールがより分かりやすく整理されることは点字使用の児童生徒にとってもさらなる発展につながるのではないだろうか。同じくなかの(2015)によると以下のとおりである。

点訳ボランティアはどんなに熟達したひとであっても、語ごとのわかちがきをしめしてあるわかちがきの辞典を携行して点訳にあたっているという。点字で学校教育をおえた点字使用者のあいだでも完全に統一されたわかちがきが定着しているわけではなく、個人によって表記のゆれがあるのが実情であるという。

点訳者にとっても、長年の点字使用者にとっても、やはり現在の「分かち書き」と「切れ続き」のルールが複雑で分かりにくいものとなっていると言えるのだろう。試験で減点対象になるほど重要視されている「分かち書き」や「切れ続き」のルールが複雑で、このように定着していないというのは問題ではなからうか。改訂を重ねて複雑化した今の表記法を一度整理し、より分かりやすいルールへと整えていく必要があると考える。

## 5. おわりに

以上、現在の点字表記法書から分かち書き・切れ続きの現状を確認し、その問題点を指摘した。これからの点字表記の在り方について述べた二つの意見はそれぞれ相反する考えではあるが、今のこの複雑化している点字表記をさらに整理し、統一する必要があるということを通じ主張したい。連濁が生じる語の切れ続きについては長年変更がされていないが、指摘したとおり、やはり連濁を続けて書き表す理由とするのはふさわしくないと考える<sup>1)</sup>。複合語の「切れ続き」の問題と合わせて検討し直し、連濁によってルールを設けるのではなく、複合名詞・複合動詞(形容詞)ともに「切れ続き」を行うか否かを統一するべきだと考える。また、「切れ続き」の基準として採用されている「拍」の考え方については、同じ語でも拍数と点字のマス数にはズレがあることを指摘した。そのため、拍数による区切りは点字には適していないと考える。もう一つの基準となっている語の「独立性」についても、その定義があいまいで分かりづらい基準となっているため、国語文法や日本語に関する専門的な知識がない人にも分かりやすく判断できるように「独立性とは何か」ということについて明記する必要があると考える。

点字は長い間、墨字とは異なる発展の仕方をしてきたが、現代の社会や視覚障がい者の生

活を考えると点字表記と墨字表記のさらなる統一が目指されるべきだと考える。もちろんその統一においては点字使用者がより使いやすい体系に整うように考慮しなければならない。点字表記の拠り所として点字表記法を整理し統一を進めることは重要な課題であるが、それは点字の表記をがんじがらめに固定するべきだということではない。個人の文章、詩やエッセイなどの文章において、墨字と同様にその表記の仕方にある程度の自由性を認めることも、点字文章の発展において大切であると考え。だがそれと同時に、日本語文の分かち書きの仕方について考察することは、日本語の構造や性質について改めて検討・考察するきっかけになるのではないかと感じた。2で述べたように日本語文の分かち書きは小学校低学年の教科書や初級日本語学習者向けの教科書、「やさしい日本語」などで行われている。点字以外の各場面ではどのように分かち書きがされているのか、もっと広く資料にあたる必要があるだろう。また、類似した文法構造をもつ韓国語の分かち書きも参考になるのではないかと考える<sup>(2)</sup>。本論文ではそこまで範囲を広げて考察することができなかったのが残念である。今回取り上げたような点字表記の問題点を、点字だけの問題ではなく日本語の問題としてより多くの人に広く考えてほしい。点字は障がいの有無にかかわらず日常のあらゆる場所に存在する。点字を「視覚障がい者だけの文字」ではなく、「日本語文字」の一つと考えてくれる人が増えてくれたら幸いである。

## 参考文献

- 伊坂幸太郎 (2012) 『残り全部バージョン』 集英社  
→渡辺京子点訳 (2013) 『残り全部バージョン』 日本点字図書館  
金子昭 (2007) 『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで』 日本点字委員会  
小学館 (2000) 『日本国語大辞典 第二版』  
鈴木博・大田勝司 (1983) 「問題提起「分かち書き」」『滋賀大國文』 21号  
全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき 第4版』 読書工房 (2019)  
全国視覚障害者情報提供施設協会 『初めての点訳 第3版』 読書工房 (2019)  
点訳者のための点字表記検索システム「点訳ナビゲーター」 ([https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/handicap/H18\\_actual\\_condition\\_survey/surveysummary\\_2-2-1.html](https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/handicap/H18_actual_condition_survey/surveysummary_2-2-1.html)) (2021年11月2日閲覧)  
中野真樹 (2016) 「日本語点字のわかちがきについて—一学校国文法との関連を中心として—」『近代日本語研究6』 ひつじ書房  
なかのまき (2017) 「点字と墨字のわかちがきについて」『ことばと文字』 7巻  
日本語学会【編】『日本語学大辞典』 東京堂出版 (2018)  
日本点字委員会「点字の話題」 (<http://www.braille.jp/topics/yonndemiyo.html>) (2021年1月27日閲覧)  
日本点字委員会『日本点字表記法 2018年版』 博文館新社 (2018)  
日本点字図書館「点字図書について」 (<https://www.nittento.or.jp/about/scene/braille.html>) (2021年1月28日閲覧)  
広瀬浩二郎 (2019) 「点字研究の最前線—正しい点字と自由な点字—」『日本語学』 (33-11)  
藤田恵・河住有希子 (2011) 「点字使用の学生が文章を読む上で感じる困難さとその要因—点字と墨字の特性の違いを中心に—」『恵泉アカデミア』  
文化庁「現代仮名遣い」 ([https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gendaikana/index.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gendaikana/index.html)) (2021年10月3日閲覧)  
見えない人・見えにくい人のための全視情協「点字のしくみ」 (<http://www.naiiv.net/braille/?tenjisikumi>) (2021年9月4日閲覧)

- 渡瀬茂（2018）「絵本・小学校低学年国語科教科書における分かち書きと文節表示」『姫路大学教育学部紀要』11巻
- 和久田哲司・光岡裕一（2008）「日本点字における医療用語の表記法の研究—文節分かち書きの原則について—」『国立大学法人筑波技術大学テクノレポート』Vol.15

## 注

- (1) ただし、医療用語に関する切れ続きなど、専門的な用語に関しては細かく区切らないと意味が取りにくい場合も多い。（和久田・光岡（2008））しかしこのような専門用語には日常ではほぼ使用しない特殊な語も多く、改めて検討する必要があると考え、本論文では言及しなかった。
- (2) 渡瀬（2018）では日本語と同じ膠着語として韓国語やトルコ語の分かち書きについて言及した。さらに英語やラテン語など、あらゆる言語の分かち書きについて触れ、「表音文字の表記で多くの場合に単語もしくは語幹に接辞を加えた文字列を単位とした分かち書きが行われると確認できるし、それは文字の表記の上で文法的な単位が明示されることにつながっているということである。そして文法的な単位が明示されることが、文章の読解のわかりやすさに直結しているからである」と述べている。